

人格変容要因としての危機

中 込 四 郎

Crisis as a factor contributing to personality change

Shiro NAKAGOMI

Abstract

A number of researches on personality have been conducted in the field of sport psychology. However, there have been very few studies which attempted to clarify personality change; that is, what factors included in sports experience may contribute to personality change and what psychological mechanism are involved.

In this paper, crisis and the behavior coping with crisis being experienced in ones life history were hypothesized as factors contributing to personality change. The authors examined the theoretical validity of crisis as one of factors by reviewing related literature in various areas of study. This work is preliminary, preparatory for the further empirical research to be conducted on personality change in the field of sport psychology. This paper discussed crisis from the following points of view.

1. The research of personality change in the field of sport psychology.
2. The crises occurring in the process of ego identity formation.
3. The crisis experienced in ones life.
4. Crisis as a turning point.
5. The crisis mode contributing to personality development.

Key words: Personality Change, Crisis Mode, Mutuality

はじめに

多様な要因が人格変容(personality change)に関わっており、さらにそれらの要因が複雑に影響しあい、変容を規定している。そして、変容の基準を何にするのかその違いによっても、個々の研究者が扱う変容を引き起こす事態が異なってくることもある。したがって人格変容要因の同定と同様に、人格変容のメカニズムを説明する人格変容理論の多様な立場を生み出している(Worchel & Byrne, 1964⁹⁰⁾)。また、研究者がどのような理論的背景に立つのかによって、特定される変容要因

が異なってくる。

本論文では、生育史の中で生起する危機(crisis)、ならびに危機解決・克服に向けての対処行動(危機様態: crisis mode)を、諸領域からの見解を引き合いに出すことにより、人格変容要因の一つとしての理論的有効性を探っていくことになる。また、その後進められるべき実証的研究への手掛りを得ることになる。本稿では以下のような手順で論述されていくことになる。

- 1) 体育・スポーツ領域における人格変容研究
- 2) 自我同一性形成過程で生じる危機
- 3) 人生において遭遇する危機的状況
- 4) 転機としての危機

5) 人格発達に資する「危機様態」

I. 体育・スポーツ領域における人格変容研究

体育・スポーツ心理学で発表されるパーソナリティ研究は、スポーツ選手の心理適性を解明しようとする意図したものが多いようである。特に近年は、心理的側面からの選手強化^{58,59)}への関心が高まり、その傾向がさらに強まってきているようである。しかし、スポーツ経験が人格形成・変容に及ぼす影響を明らかにすることも体育・スポーツ心理学においては重要な関心事であることに変わりはない。国内外の体育・スポーツ心理学書の多くが、この問題に触れていることから裏付けられる。

スポーツあるいは運動経験による人格形成・変容に関して、情報を得ることのできるこれまでの研究として、次のような研究のタイプ分けが可能である⁶⁾。

- ・運動療法（スポーツセラピー）による人格変容
- ・短期間の集中的運動経験による事前・事後の変容
- ・縦断的アプローチによる変容
- ・運動経験の質・量の差異（例えば、経験年数、種目差、熟練—非熟練者、etc）と人格特徴の関連性

などがあげられる。

Kroll(1970)³⁵⁾はこれまでの研究を概観し、運動経験とパーソナリティとの関連性について、関連性なしとするものから、経験により変容がなされるまでの5つの異なるタイプの見解を見出している。このことからわかるように、従来の研究では運動経験が人格変容を引き起こしうるのであるのか、統一された証拠が得られていない。また、関連性を認める結果を得た研究に限定しても、運動経験がどのようにして人格変容に影響しているのか、そのメカニズムをそれらから知ることはできない。

市村(1987)²⁷⁾は、体力の発達と心理的発達の関係を扱った研究を紹介する中で、「…心身の発達の相関がどのようにして生起するかという結論を検証しようとする研究は少なく、この二側面の測定資料の相関関係を提示するにとどまっている研究が大多数である。」と述べている。このような主張

は、運動経験とパーソナリティの関係を扱った研究にも当てはまるようである。ここでも両者の因果関連性の解明をもくろんだ研究アプローチが必要のようである(Kane, 1972²⁹⁾)。こうした人格変容研究における問題点の指摘は以前から言われていることであるが、「スポーツが人格形成や変容に役立つことを一般通念としているが、…」(武田, 1987⁸³⁾)といった受けとめ方が、単に変容の程度や内容を確認するだけの研究に終わらせる原因の一つになっているのかもしれない。

杉原(1985)⁷⁸⁾は「運動経験がどのようにしてパーソナリティに影響を与えるのかそのメカニズムについての理論的基盤をもった仮説にもとづいて研究を進める必要がある。」と述べている。われわれはどういった要因（運動経験の質）が変容のきっかけになるのか、そしてどのようにして人格変容がなされるのかを取り上げる必要がある。前述した4つの研究タイプの中では、スポーツセラピーに関するものだけが、実際にそこで経験された運動の質的側面に触れているにすぎない。

人格変容研究を活発化してこなかったもう一つの原因は、多様な要因が変容に関わっており、また、仮に有意な要因を運動経験の中に認めたとしても、それがきっかけとして変容が生じるまでには運動場面だけに限定できないといった複雑さも関係しているようである。つまり、松田(1979)⁴³⁾の主張するような、「スポーツを含めた生活全体の中から個体と環境の力動的関係のもとに変化が起こっているものであり、…」といったことも考慮する必要がある。運動経験における人格変容を引き起こしうる多様な要因の中から、一つだけを取り出して研究を進めることには限界を認めねばならない。しかし、運動経験の中から抽出された、あるいは研究として焦点づけられる一つの要因が、それを契機として生活の他の領域にも広がりをおこしうるものであるならば、松田の問題にする“力動的関係”を扱っていくことになるであろう。

II. 自我同一性形成過程で生じる危機

危機の概念を背景として、青年期の人格発達への理解を深めた者にE.H.Eriksonをあげることができる。彼は青年期の危機(adolescence crisis)を同一性危機(identity crisis)とほぼ同義に用いている。後期青年期にさしかかった若者たちは、そ

れまで拠り所にしてきた親から受け継いだ同一性を放棄し、みずからの新しい同一性を獲得せねばならないといった、心理・社会的発達課題をつきつけられる。したがって若者は、自我同一性の確立を主題とした深刻な危機に直面することになる。Erikson(1959)¹⁵⁾は、「…、このような発達に伴う正常な危機は、外傷的で神経症的な強制された危機とは異なっている。」と、同一性危機を正常発達過程の一つとしてとらえている。このことからBrownell(1984)¹¹⁾は、Eriksonによりそれまでの危機概念の中に成熟的事象が含まれ、概念の拡大が図られたと評している。

Erikson 以後の自我同一性に関する心理学領域からの研究の流れについては、いくつかのレビュー論文によって知ることができる(Bauer, 1972⁵⁾; Bourne, 1978ab^{8,9)}; Marcia, 1980⁴⁰⁾; 鏑, 他, 1984⁸⁵⁾; 無藤, 1987⁵⁰⁾)。これまで行なわれてきた研究の主流は、同一性の程度や形成状態と心理変数との関係を討論することにあつた。同一性形成そのもののプロセスを厳密にたどり、その内容を吟味するといった研究が少なかったようである(鏑, 他, 1984⁸⁵⁾)。

Baumeister(1986)⁶⁰⁾は同一性危機に関するこれまでの研究に対して、process model が不足していることから、危機が始まりそして解決されるまでのプロセスについてわずかの情報しか提供していないと批判している。そこで彼は Habermas (1973)²⁴⁾の概念わくを出発点として、同一性危機を二つ想定している。一つは同一性欠損(identity deficit)、そしてもう一つは同一性葛藤(identity conflict)である。前者は目標や価値への自己投入の不足により特徴づけられる、不十分な自己定義の状態である。後者は、多面的な自己定義が自分の中に秩序づけられていないような状態にある者をさしている。彼はこのモデルから同一性危機の状態を力動的に論じており、両者とも危機の開始は、同一性の選択決定といった差し迫った問題を突き付けられることによって生み出されると考えられる。

青年期心性を扱った様々な文献からも指示されるように、同一性危機の出現そのものは正常な発達の危機(normative crisis)と考えねばならない。しかしこの同一性危機を契機として、自我同一性の混乱・拡散と呼ばれるような自我喪失感になり、精神病理学的徴候を呈する者もある。鏑(1974)⁸⁴⁾

は自我同一性の危機における基本様態について、単なる分類的発想でなく、心理学的構造論的に、かつ力動的に説明を行なっている。彼は臨床的事例を通して、①対人関係の距離の定位困難の問題、②母への接近と分離の問題、③自我の受動性と能動性の問題、の3つの角度から考察をすすめている。また、Laing(1960)³⁶⁾の主張する”ひき裂かれた自己”の様態、つまり、呑みこまれ(engulfment)、内破(implosion)、石化(petrification)も同一性危機の様態とも考えられる。心理学領域からも同一性危機での心理状態あるいは主観的体験内容が明らかにされている。その主なものを拾ってみると、自己投入の迷いや価値の混乱(Newman & Newman, 1978⁵⁷⁾)、空虚感(Rubins, 1968⁷³⁾; Schafer, 1973⁷⁵⁾)、混乱、当惑、落胆(Bickford, 1971⁷⁾; Schenkel & Marcia, 1972⁷⁶⁾)がある。精神病理学からの同一性の危機は自我同一性の拡散状態であり、正常発達過程での危機とは区別されねばならない。

Erikson が同一性危機として熟考したのは、特に青年期後期であったことはすでに述べた。しかし「同一性過程は青年期をもってして始まるのもなければ、終わりを告げるものでもない。それは幼児期の自己一対象の分化から始まり、成熟期の自己一人類の統合(self-mankind integration)による最終段階に至る。」(Marcia, 1980⁴¹⁾)といった主張からもうかがわれるように、Erikson 自身は同一性形成の過程は生涯を通して行われると受けとめている。その表れとして、それまでは青年期を理解するための一つの鍵概念となっていた同一性を、中年期危機に対しても今日では援用するようになってきている(武則, 1983⁸¹⁾; 岡本, 1985・1986^{60,61)})。中年期にさしかかり、生物学的ならびに心理・社会的変化を経験することによって、自我同一性の再確立を迫られるようである。

同一性形成の過程がライフサイクルを通して行われるものであるとすると、個々の同一性への手掛りは異なるとしても、それへの危機は各発達段階で生じることになる。以下に示す Erikson の漸成原理(epigenetic principle)を背景とする心理社会的発達の分化図式の中にそのことが具体的に示されている(表 1¹⁶⁾)。彼は人間生涯の発達段階を8つに分け、発達段階それぞれに達成すべき心理・社会的発達課題を想定している。しかもそれぞれの課題は、例えば、基本的信頼 対 基本的

表1 Eriksonの心理社会的発達の分化図式

	1	2	3	4	5	6	7	8
I 乳 児 期	信 頼 不 対 信				一 極 性 対 早熟な自己分化			
II 早期児童期		自 律 性 対 恥, 疑 惑			両 極 性 対 自 閉			
III 遊 戯 期			積 極 性 対 罪 惡 感		遊戯同一化 対 (エディプス) 空想同一性			
IV 学 齡 期				生 産 性 対 劣 等 感	労働同一化 対 同一性喪失			
V 青 年 期	時 間 展 望 対 時 間 拡 散	自 己 確 信 対 同一性悪感	役 割 実 験 対 否定的同一性	達成の期待 対 労働麻痺	同 一 性 対 同一性拡散	性的同一性 対 両性的拡散	指導性の分極化 対 權威の拡散	イデオロギ ーの分極化 対 理想の拡散
VI 初期成人期					連 帯 性 対 社会的孤立	親 密 さ 対 孤 立		
VII 成 人 期							生 殖 性 対 自己吸収	
VIII 成 熟 期								完 全 性 対 嫌悪, 願望

不信〈乳児期〉といったように、対極をなすような表記の仕方がとられている。また、表1からもわかるように Erikson は、発達を線的な縦軸の中でとらえておらず、段階状の図式化を示していることも特徴である(鱈, 1986⁸⁷⁾)。各発達課題の達成により次の段階への発達が可能となったり一発達の危機を乗り越えるというのは、次の発達の危機を迎える素地となる一、逆にその失敗により、発達の停滞あるいは低下の両方の可能性を含むとしている。そのようなことから各段階の分岐点を、展開へも退行へも方向づけられるものとして「危機」と呼んでいる。

III. 人生において遭遇する危機的状況

Erikson の自我同一性論の中で危機について紹介してきた。彼自身の著書の中からも危機となりうる具体的な事象を知ることができるが、臨床的立場であることや同一性形成過程に限定されていたことから、危機事象を概観するには不十分と限界があった。ここではまず、“Life Stress”, “Life Change”等のテーマの下に行われている研究に触

れながら、「危機」概念への理解を深めていくことになる。

研究の流れを追ってみると、初期の研究では life stress による身体的・心理的問題への影響を明らかにしている。そこでは、

- ・ life change は発達主体者に対して適応を迫り、それによりストレスな状態をもたらす。
- ・ 著しい life stress を経験している者は、身体・精神的問題を受けやすい。

といった背景から研究が進められてきているようである (Sarason, et al, 1978⁴⁴⁾)。しかしその後の研究では、生涯発達の中で生起する生活上の出来事がもたらす危機状況での適応過程に注目したり (Hultsch, 1979²⁶⁾)、危機事象の個人差 (Redfield, 1979⁶⁷⁾)、そしてある特定の発達段階での危機事象の詳細な検討 (Yeaworth, 1980⁹³⁾) や発達差を明らかにする研究 (三川, 他, 1986⁴⁴⁾) へと多方面の研究が認められる。しかし今のところ、人格変容への契機として危機をとらえるといった視点から、危機への対処行動の分析・検討を行なった研究は、この領域からは認められないようである。

life stress あるいは life change と呼称はこと

なるが、これらの研究を通して、日常生活において生じる危機事象と考えられる具体的出来事を知ることができる。研究の目的や対象により若干異なるが、その主なものとして、友人の死、家族の死、友人とのトラブル、学業上の問題、転校、病気や怪我、就職、退職、他がある。これらの危機が各発達主体者に与える影響、経験の程度等は多様である。Parad(1965)⁶⁴⁾は危機を、偶発的危機（または「状況に伴う危機」）と発達の危機（または「成熟に伴う危機」）といった2つのタイプに分類している。ここにリストされた危機の多くは前者のタイプに含まれることになる。しかし、それらの危機が契機となり、後者の意味合いへと変化することがある。

次に、青年期の自我同一性に限定した形成過程で生じる危機の契機となる具体的事象を知るために、Marciaの同一性地位アプローチを用いた一連の研究をとりあげることができる—Marcia法については、人格変容要因としての危機といった立場から後述される。—。Marcia(1964)³⁸⁾はEriksonの主張に基づき、同一性達成の契機となる領域を、職業やイデオロギー（政治的、宗教的思想）に同定している。その後、研究者自身の関心の所在や研究対象に応じて、性行動、性役割、対人関係、価値観、等の領域拡大がなされている(Schenkel & Marcia, 1972⁷⁶⁾; Matteson, 1972⁴²⁾; Waterman & Nevid, 1977⁸⁰⁾; 無藤, 1979⁴⁹⁾; Rowe & Marcia, 1980⁷²⁾; 下山, 1981⁷⁷⁾; Grotevant et al, 1982²³⁾。これらの個々の領域に対して、決定あるいは積極的な自己投入を行なう前に、青年期にある者の多くは危機を経験すると言われている。

life stress, life change等の表題で進められる研究、及び同一性地位アプローチに関する研究でとりあげられる危機事象は、文字どおりの破壊を意味するものではない。同一性達成の契機となる危機は、社会の側の期待や個人の内的発達欲求に基づく自己定義を中核とする課題解決に関するものである。選択決定を迫られたり、それまで身に付けた行動様式の修正を余儀なくされた時に危機が生じる。また、かけがえのない他者との死別や離別、病気、事故といったような人生において遭遇する危機は、広い意味での生活環境の変化により生じるものといえる。

Rapaport (1965)⁶⁵⁾は「危機」概念の不備・あい

まいさを指摘する中で、心理的ストレスは病気を発生させる可能性をもつのに対し、「危機」はそうした可能性と同時に「成長促進的可能性」をもつとして両者を区別している。そして木村(1986)⁸¹⁾は危機と危険を対比させることにより、「“危険”の語がおおむね外からの脅威に対して用いられるとするならば、“危機”の語はそのような危険な状況に直面したときの内的な状態に対して用いられると考えてもよい。」と説明している。本稿で問題とする危機は後者のタイプである。

IV. 転機としての危機

以下で紹介するように、生育史の中で生じる様々な危機が、人格発達における転機であると主張するいくつかの立場を認めることができる。

Eriksonは、「アイデンティティの危機」とはいまや、成長と回復と分化の資源を糾合しつつ、発達が何とかなされねばならないときの、必要不可欠の転回点(turning points)や決定的瞬間(a crucial moment)を指すものとして、受けとられつつあるのである。…」と、同一性形成過程における危機に意味づけを与えている(Identity: Youth and crisis, 1968²⁰⁾)。また、Erikson(1959)¹⁴⁾は、「ある重要な部分機能の成長に関する自覚のめばえが、本能エネルギーの移行と平行しておこり、しかもその部分に特有な傷つきやすさ(vulnerability)をひきおこす結果、その段階は、一つの危機になるのである。」(Identity and the Life Cycle)と述べている。これらの主張から、同一性形成への歩みは危機との出会いによって引き起こされ、それは同一性の確立の機会をつくっていることになる。

Eriksonの同一性論は青年期心性を理解するうえで、非常に有効な枠組みを与えている。したがって青年期の自我同一性の模索に伴う危機を転機と考える立場は、思春期・青年期の者への心理治療的接近を試みた事例報告の中にも数多く認められることになる。長尾(1976)⁸¹⁾は「危機とは、一つの分岐点であり、自我の危機をうまく適応的に乗り越えることができると、強い自我形成へと向かい、一步誤ると、神経症や精神病など、時には非行や反社会的行動などへと転落してゆくことになる。」と述べている。また、岡野(1984)⁶²⁾は、登校拒否、親や教師への反抗といった問題行動を示した17才男子高校生への心理療法的かかわりの中で、治療

していく過程を「危機は危険の要因とチャンスの要因を持つ分岐点を意味する。」と述べている。青年期の危機はその人の人生や自我形成の分岐点をなし、しかもこのように危機の“積極的意義”に目が向けられているのである。青年期に限らず、何らかの主訴をかかえ心理相談室に来談してくる事例は、心理的危機状態にあるといえる。面接がいつも功を奏するわけではないが、主訴（危機）そして心理療法的経験を通して、来談者が新しい方向へと積極的に歩み出していくことに接する。

思春期・青年期の者への心理臨床だけでなく、「危機を転機」として位置づける治療理論を展開するものとして危機援助(crisis intervention)法がある。安藤(1979)³⁾は近年の危機援助法について、「危機という〈禍〉を転じて〈福〉となすために、危機状態にあるすべての個人や家族に対して救急的に専門的援助を提供しようとして、サービス提供者たちが主唱し案出したもの」であると説明している。

Brownell(1984)¹¹⁾は、これまであいまいにとらえられていた危機概念を、精神科、メンタルヘルス看護、社会学、そして心理学領域から探ることによって、「それぞれの領域ではその後の問題への対処能力の向上に資することになるであろう、人生での転回点あるいは重要な側面として危機に注目している。」といった共通項を明らかにしている。Caplan 以後危機介入理論の中には、ストレスあるいは危機を乗り越えることにより新しい対処行動—新たな適応能力—を身につける、といった適応概念が背景となっているようである(Hobbs, 1984²⁵⁾)。Aguilera ら(1978)²⁾が精神分析や簡易心理療法と対比させながら危機療法の特徴を浮きぼりにしている。危機療法は他の治療法（特に精神分析）のように根本的な人格変容を治療目標におくことはなく、当面する危機の解決およびそれを契機とした対処能力の向上を目標にしている。

さらにこの章での主張を他領域からも求めることにする。大野(1960)⁶³⁾は人生的危機を、それまでの生き方がもう続けられなくなったという自覚によって起こるものであると定義している。彼は特に、青年期の恋愛を中心にして、「…、人生的危機として捉えられる失恋においては、それだけに終わらず、自己の人間観、人生観の破壊を伴う。しかも、それまで具体的行動に向けられていた思考と感情は、具体的対象の喪失と共に、その方向性

を失い、自己にむけらざるをえないのである。」と、危機が思想形成の内的モメントになることを示唆している。また、Cilligan(1982)¹²⁾は、妊娠中絶を迫られた女性の面接調査（中絶決定時における面接と、その後約1年後の面接）を通して、中絶といった危機を経過した後の発達の移行の過程を明らかにしようとした。彼女もまた、「挫折を認識することが新たな道の発見につながる様子が示されています。しかし、危機の転回点はまた、ニヒリズムと絶望に陥る可能性をはらんでいます。」と、危機の二面性を主張している。

弁証法的心理学(dialectical psychology)を提唱する Riegel, K. F. の著述の中でも、危機を発達の契機としてとらえている。その主なものを拾ってみると、「危機は個人と社会の発達の間で生じる相互作用の質的変化を反映している」、「建設的意味合いから、危機は生物学、心理学、そして身体的側面での構造的変化を結合する“ナット”である。すなわち危機は変化への機会となり、そして変化へ意義を与える。」(1975)⁶⁸⁾、「多くの危機は、新たな発達を導く建設的な出会いを示す」(1976)⁶⁹⁾等がある。弁証法的モデルに基づく発達論を、矛盾—解決—質的変化として発達がなされると、容易にまとめきれるものではないが、そこに出てくる“contradiction”, “conflict”といった用語は、本稿で問題とする“crisis”と同義の部分が大いようである。

以上のように、危機に対して発達上のピンチであると同時にチャンスでもあるといった両義性を支持するいくつかの立場を認めることができた。しかし危機の経験が人格変容に関わっていく過程を明らかにした実証的研究を認めることはできない。

成人の同一性形成過程をピアジェの発達理論を援用し、同化(assimilation)と調整(accommodation)の2つの側面から検討したり(Whitbourne, 1986⁸⁹⁾)、防衛機制を背景とした対処方略(coping strategy)のタイプ分け(Breakwell, 1986¹⁰⁾)、そして、危機への対処行動の因子分析を通してその構造を求める(三川・他, 1986¹⁵⁾)といった研究がある。これらの研究では、今のところ危機後の対処プロセスの明確化を主たる目的にしているようである。人格変容要因として危機をとりあげ、それがいかに人格に働きかけているのかを明らかにするための研究過程としては、こうした研究が必要

となってくる。危機への対処行動の違いによって、変容への影響の異なることが予想されるからである。

V. 人格発達に資する「危機様態」

本稿における危機様態(crisis mode)は、危機的状況における対処行動の過程をさしている。つまり、危機の生起からその解決に向けての探求・努力の状態を分析することにある。

発達主体者にとって危機的事象が、いわゆる「危機」として意識されねば、対処行動の多くは生み出されることがない。大野(1960)⁶³⁾は「人生的危機は、外的状況の変化によって惹起されはするが、それが主体的な考え方の動揺となって、始めて危機として成立する。」と述べている。村瀬(1976)⁴⁸⁾は青年期危機がおとずれ易くなる人格構造特徴として感受性が鋭く、内省力豊かな人、そして自己拡張欲や向上欲の強い青年、等をあげている。

危機が人格発達上の転機となりうるならば、それを経験することにより、発達が促進されるのかあるいは後退してしまうのかは、そこでの危機様態が強く関わってくるものと考えられる。

(1) 同一性地位(identity status)アプローチによる同一性研究

ここでは人格発達に資する危機様態について模索することになる。手掛りの多くは、自我同一性研究に求めることになろう。

Erikson の自我同一性に関する測定的研究が数多くなされてきたにもかかわらず、その形成過程を扱った研究の少ないことは前述したとおりである。その中にあっても、Erikson の難解な同一性概念を実証的レベルで研究を進めた Marcia を出発点とする一連の同一性ステータスアプローチによる研究は高く評価されている(加藤, 1986³⁰⁾)。Marcia の他にも Erikson の同一性概念の操作的

定義づけを試み、たくさんの同一性尺度がこれまでに開発されてきている(Rasmussen, 1964⁶⁶⁾; 古沢, 1968³³⁾; Baker, 1971⁴⁾; 水野, 1982⁴⁶⁾他)。しかしそれらは同一性達成の程度を明らかにするものであり、形成過程解明への情報を提供してはいない。表 2 に示すように、Marcia は同一性達成の契機となる領域に対して、過去の危機(crisis)と現時点での自己投入(commitment)の有無により、4つの同一性地位を半構造化された面接により導いた。高橋(1984)⁹²⁾は危機と自己投入といった2つの観点を確かめることにより、Erikson の主張する自我同一性の基本的特性である心理社会的相互性を反映することができると述べている。

この測定方法を用いて求められる4つのステータス間を、様々な心理変数を用いて比較を試みた数多くの研究を概観してみると(Bourne, 1978 ab^{8,9)}; Marcia, 1980⁴⁰⁾; 他)、同一性達成(Identity Achievement)型が総じて、他の型よりも成熟した人格特徴を示すことが明らかにされている。これらの研究結果から、生育史の中で生起する危機が人格発達に資すると結論することはできない。なぜなら同一性達成型は職業やイデオロギー等の領域で、過去に選択決定での迷いを経験し、そして現在それらの領域に対して積極的に自己投入している者であった。したがって同一性達成者に認められる成熟した人格特徴には、危機の経験の他に、その領域での確固とした自己投入がなされているといった側面が加わっているからである。特に、適応感を強く反映するような心理変数からのステータス間の比較で得られた結果は、危機よりも自己投入の方に多く依存していることが考えられる。

Lutes(1981)³⁷⁾は Marcia の理論を、「そこでの crisis は、かならずしも情緒的なもの、あるいは混乱を含まず単に選択を意識し、そして決定されたのかを仮定しているにすぎない。」と批判してい

表 2 自我同一性ステータス

	Identity Status			
	Identity Achievement (同一性達成)	Foreclosure (早期完了)	Identity Diffusion (同一性拡散)	Moratorium (モラトリアム)
Crisis	present	absent	present or absent	in crisis
Commitment	present	present	absent	present but vague

(Marcia, 1980より)

る。危機がその個人にとってどの程度のものであったのか、どう対処したのか、そしてその結果どうなったのか等、危機様態を確かめることが必要になってくる。また、Life Stressの研究からも明かにされているように、個人の生育史の中でもつ危機事象の意味、影響力を多次元にとらえねばならない。その表れとして、60年、70年代の研究では、問題とされることのなかった、Marciaのステイタスアプローチにおける評定法への再検討が行なわれ出してきた(Rogow, et al, 1983⁷⁰⁾; Rothman, 1984⁷¹⁾; Kroger, 1986³⁴⁾)。各対象者のステイタスが求められる手順は、領域ごとのステイタスが評定された後、それらを総合して—Marcia自身、この総合の仕方については明示していない—、全体的な同一性地位が決定されていった。しかし性差や年齢差を検討する研究を通して、設定された領域の重みが異なることが明らかとなった。このことはさらに個々人の対象間においてもあてはまることである。設定されたいくつかの危機領域の中で、際立って重要かつ影響力のある領域がその中に存在するならば、他の領域を含めた全体としての評定よりもその代表的領域からステイタスを求めることの方が有効である場合も生じてくる。したがって危機の有無を明らかにするだけでなく、Grotevant & Thorbeck (1982)²²⁾や Grotevant, et al (1982)²³⁾が試みているように、各領域へのかかわり方を、深み(depth)と広がり(breadth)からさらに面接内容を評価するといった工夫も必要となる。

同一性地位アプローチからの研究は、同一性形成過程を手掛りとして、それまでの達成—拡散といった一次元でとらえた同一性研究と比較して、自我同一性をより多面的にとらえ、心理学領域での研究促進をはかった。しかし4つの同一性地位に処理することにより、地位間の比較に終始し、形成過程を論ずることから遠ざかってしまったようである。つまり、同一性地位アプローチによるMarcia以後の数多くの研究から導かれる主要な結果は、各同一性地位にある者の心理的特徴についてであった。

(2) 危機様態に対する分析の視点としての「相互性」

山田(1978)⁹¹⁾は Erikson の危機説に依拠して青年期を定義する中で、「…、青年は、その危機—同一性確立をめぐる危機—と闘う過程で自己の存在

や人生に意味を付与し、その後の生き方に重大な影響を与えることにもなる思想形成・成長をとげるのである。」と、危機の積極的意義に注目している。危機が人格発達上積極的な意義をもつためには、単に危機経験の有無にとどまらず、発達主体者の危機解決に向けての対処行動(危機様態)が問題となってくるはずである。鐘(1971)¹⁹⁾が日常的例をあげて述べているように、ひとは心理的危機という峠をどのようにこえるかによって、人格的に決定的な色合をつけていくのである。

危機様態がどのように発展していくかは、危機事象がその個人にとってもつ意味、それまでの生育史の中で形成された人格構造的側面(Donovan, 1975¹³⁾; Marcia, 1976³⁹⁾; 長尾, 他, 1977⁵²⁾)、そして、その個人をとりまく環境要因(Morash, 1980⁴⁷⁾; Rowe & Marcia, 1980⁷²⁾; Adams & Fitch, 1983¹¹⁾)が複雑に関係している。Erikson は同一性形成を、自己と対象の間に「反省と観察の同時的な過程」(1968)²¹⁾が存在すると述べ、そのような対象関係の特徴として、「働きかけるとともに働きかけられる」といった関係(相互性 mutuality)を強調している。さらに Erikson (1964)¹⁷⁾はこのような交わりの世界を「事実性 actuality」と呼び、「参加の世界であり、最少の防衛的態度と最大の相互的自己実現を可能にするような他者との交わりの世界である。相互的活動性 mutual activation は、この問題の要である。というのは、自我の強さとは現実吟味のあらゆる方法を利用しながら、各発達段階にある相互的影響の働き合いの中で自分が他人によって動かされながら、同時に他人を動かし、自分の個性によって他人を動かしながら同時に、“他人のもつ人間の個性によって自分が影響される”のである。これが、自我の事実性である。」と述べている。

Erikson は各心理・社会的発達段階に対応して、最も影響力があり、そして最も深い心理的かかわりをもってくる対人関係の範囲(radius of significant relations)を明記している。その中で相互性の典型例と考えられるものに、最早期の母子関係をとりあげることができる。「ここでいう相互性とは、今後の発達に必要な自分の内なる強さを培っていくために、お互いにかかわり合っている関係のことである。…乳児の最初の笑いは、顔の上にあられる単なる筋肉の運動のかたちにすぎないのだが、これを見ると成人は微笑をかえさざるを

得ない気持ちをかき立てられ、子どもに“わかってもらった”という期待が満たされる。そしてこれによって安定を得る。この安定を成人から示されることはまた同時に、乳児の要求でもある。」(Erikson, 1964¹⁸⁾)。相互の働きかけ合いをとおして、乳児は最初の発達課題である基本的信頼感を達成し、次の発達段階へと進んでいくのである。

青年期における同一性の危機は、それまでの自分を問い直すこととも言い換えられる。その時 Erikson が考える同一性危機の解決—同一性の形成—は、状況への主体的かかわりと、「現実を引き受けること」(山岸, 1983⁹²⁾)によって行われる。各個人は同一性形成の契機となる諸領域の中で、自己の働きかけと、同時に対象からの働きかけによって、同一性の感覚を生み出していくことになる。

またこうした相互性は発達主体者の中に、「見る自己」(主体的自己)と「見られる自己」(客体的自己)との間にも成立することが考えられる。危機様態での相互性の展開は発達主体者が危機状況にいる自分を対象化した時、まわりの環境との関係の中だけでなく、自分自身の中で“危機にある自分”や“対処している自分”と働きかけ合う状態をもたらすことになる。もちろん、自己の中での相互性が可能となるためには、個をとりまく他者からの働きかけによって大きく影響されていることは見逃すわけにはいかない。小林(1983)³²⁾は「“出会い”が起きるときには、一人の人間という存在者が、別の人間という存在者に会うのであって、各々の存在者に会うということが出来る。そして、他者に会うことによって自分自身についての認識を得、他者について経験することによって自分自身を照らし出して、自分自身と出会うことができよう。」と、出会いによる人格変容を説明している。小林の視点(心理臨床の場)とは異なるが、金子(1976)²⁹⁾は人間と人間、人間と自然、そして人間と精神的存在や芸術的文化財、といった「出会い」を考えている。彼は金子の言うような“出会い”を特に「対話的生」と呼び、「対話は私のうちに発見・受容・自己変革を生じさせ、私を自己の実存にまで導いてゆく運動として展開する」と述べている。このような機能をもつ“出会い”や“対話”は、まさに相互性といえる。危機との出会いが触媒となり、自分自身との出会いが導かれることになる。そのためにも金子の主

張するような「対話的生」が、自分と危機との間に生起する必要がある。

おわりに

Erikson の自我同一性論に多くの拠り所を求めながら、人格変容要因としての危機ならびに危機様態について論述してきた。危機様態の分析の視点として「相互性」をとりあげたが、それを反映した具体的な研究への方略を示すまでにはいかなかった。

すでに筆者らはこの相互性の程度を操作的に crisis, exploration, commitment の3側面から確かめることにより、運動選手の同一性形成の特徴についていくつか報告してきた^{53,54,79,80)}。しかし本稿の中でも論じられているように、相互性はダイナミックな内容を含む概念であり、それらの研究結果からの主張には自ずと限界が生じた。筆者のその後の研究ではもっぱら事例を通して、危機様態の詳細な分析を行なってきた^{55,56)}。様々の危機様態における相互性の分析、ならびに人格変数との対応を試みることの積み重ねにより、危機を人格変容要因とする妥当性やその分析の具体的手掛りをさらに求めていかねばならない。

ところで、「なぜ相互性でなければならないのか」といった疑問が当然湧いてくる。人格変容において危機ならびに危機様態での相互性が必要十分条件であると主張してきたわけではない。今後はパーソナリティ理論、特に人格変容の機序を展開する理論の中で、さらに再考することも必要である。

注)

鈴木との共同研究により、「スポーツ経験による人格変容に関する研究展望」と題して報告される予定である(岐阜大学教育学部研究報告—自然科学一、第12巻、1988.)。この論文の中では、スポーツ経験による人格変容・形成に関するこれまでの研究を幅広く概観することにより、その成果や問題点を探り、研究方法上の課題について述べている。

引用・参考文献

- 1) Adams, G.R. and Fitch, S. A., “Psychological environments of university departments :

- Effects on college students' identity status and ego stage development," *Journal of Personality and Social Psychology*, 44 : 1266—75, 1983.
- 2) Aguilera, D. and Messick, J., *Crisis intervention : Theory and methodology*, Mosby, 1987.
 - 3) 安藤延男 「危機援助法」 岡堂哲雄 (編), 心理臨床入門, 新曜社, 1979.
 - 4) Baker, F., "Measures of ego identity : A multitrait multimethod validation," *Educational and Psychological Measurement*, 31 : 165—73, 1971.
 - 5) Bauer, R., "A critical review of research methodology on E. Erikson's theory of ego identity," *Psychologica Belgica*, 12 : 1—7, 1972.
 - 6) Baumeister, R.F., *Identity : Cultural change and the struggle for self*, Oxford University Press, 1986.
 - 7) Bickford, J., "The search for identity," *School Counselor*, 19 : 191—94, 1971.
 - 8) Bourne, E., "The state of research on ego identity : A review and appraisal. Part I," *Journal of Youth and Adolescence*, 7 : 223—51, 1978a.
 - 9) Bourne, E., "The state of research on ego identity : A review and appraisal. Part II," *Journal of Youth and Adolescence*, 7 : 371—93, 1978b.
 - 10) Breakwell, G., *Coping with threatened identities*, Methuen, 1986.
 - 11) Brownell, M.J., "The concept of crisis : Its utility for nursing," *Advances in Nursing Science*, 4—4 : 10—21, 1984.
 - 12) Cilligan, C. (1982), *In a different voice : Psychological theory and women's development*, Harvard University Press, 岩田寿美子 (監訳), もうひとつの声, 川島書店, 1986.
 - 13) Donovan, J.M., "Identity status : Its relationship to Rorschach performance and to daily life pattern," *Adolescence*, 10 : 29—44, 1975.
 - 14) Erikson, E.H. (1959), *Identity and the life cycle*, International University Press, 小此木啓吾 (訳編), 自我同一性, 誠信書房, 1975, p. 58.
 - 15) 同 上, p. 152—53.
 - 16) 同 上, p. 158.
 - 17) Erikson, E.H. (1964), *Insight and responsibility*, W. W. Norton and Company, 鑓幹八郎 (訳), 洞察と責任, 誠信書房, 1971, p. 165—66.
 - 18) 同 上, p. 237—38.
 - 19) 同 上, 訳者 (鑓) 解説, p. 285.
 - 20) Erikson, E.H. (1968), *Identity—Youth and crisis*, Norton, 岩瀬庸理 (訳), 青年と危機, アイデンティティ, 金沢文庫, 1973, p. 5.
 - 21) 同 上, p. 15.
 - 22) Grotevant, H.D. and Thorbecke, W.L., "Sex differences in styles of occupational identity formation in late adolescence," *Developmental Psychology*, 18 : 396—405, 1982.
 - 23) Grotevant, H.D., Thorbecke, W.L., and Meyer, M.L., "An extension of Marcia's identity status interview into the interpersonal domain," *Journal of Youth and Adolescence*, 11—1 : 33—47, 1982.
 - 24) Habermas, J., *Legitimation crisis*, Beacon Press, 1973.
 - 25) Hobbs, M., "Crisis intervention in theory and practice : A selective review," *British Journal of Medical Psychology*, 57 : 23—34, 1984.
 - 26) Hultsch, D.F. and Plemons, J.K., "Life events and life-span development," in Bates, P.B. and Brim, O.G. (Eds.), *Life-span development and behavior*, vol. 2, Academic Press, 1979, p. 1—36.
 - 27) 市村操一 「第2章 児童の体力の発達」 原野広太郎・宮本美沙子 (他編) *児童心理学の進歩* Vol. XXVI, 金子書房, 1987.
 - 28) 金子晴勇, 対話的思考, 創文社, 1976.
 - 29) Kane, J.E. (Ed.), *Psychological aspects of physical education and sports*, Routledge and Kegan Poul, 1972.
 - 30) 加藤 厚 「同一性測定における2アプローチの比較検討」 *心理学研究*, 56—6 : 357—60, 1986.
 - 31) 木村 敏 「危機とはなにか」 *青年心理*, 60 : 2—10, 1986.
 - 32) 小林 司, 出会いについて, 日本放送出版協会, 1983.
 - 33) 古沢頼雄 青年における自我同一性の形成と親子関係 依田 新 (編) *現代青年の人格形成* 金子書房, 1968.
 - 34) Kroger, J., "The relative importance of identity status interview components : replication and extension," *Journal of Adolescence*, 9 : 337—54, 1986.
 - 35) Kroll, W., "Current strategies and problems in personality assessment of athletes," in Smith L.E. (Ed.), *Psychology of motor learning*, Athletic Institute, 1970.
 - 36) Laing, R.D. (1960), *The divided self : An existential study in sanity and madness*, Tavistock Publications, 坂本健二 (他訳) ひき裂か

- れた自己, みすず書房, 1971.
- 37) Lutes, C.J., "Early marriage and identity foreclosure," *Adolescence*, 16 : 809—15, 1981.
- 38) Marcia, J.E., "Determination and construct validity of ego identity status," Unpublished doctoral dissertation, The Ohio State University, 1964.
- 39) Marcia, J.E., "Identity six years after: A follow-up study," *Journal of Youth and Adolescence*, 5 : 145—60, 1976.
- 40) Marcia, J.E., "Identity in adolescence," in Adelson, J. <Ed.>, *Handbook of adolescent psychology*, John Wiley and Sons, 1980, p. 159—87.
- 41) 同上, p. 160.
- 42) Matteson, D.R., "Exploration and commitment: Sex differences and methodological problems in the use of identity status categories," *Journal of Youth and Adolescence*, 6 : 353—74, 1972.
- 43) 松田岩男 体育心理学, 大修館書店, 1979, p. 291.
- 44) 三川俊樹・中西信男 「危機的状況と対処行動に関する研究(1)」 日本教育心理学会第27回大会発表論文集, 1985, p. 420—21.
- 45) 三川俊樹・中西信男 「危機的状況と対処行動に関する研究(2)」 日本相談学会第19回大会発表論文集, 1986, p. 70—71.
- 46) 水野正憲 「不安の研究(3)—不安と自我同一性—」 岡山大学教育学部研究集録, 60 : 255—69, 1982.
- 47) Morash, M.A., "Working class membership and the adolescence identity crisis," *Adolescence*, 15 : 313—20, 1980.
- 48) 村瀬孝雄 「青年期危機概念をめぐる実証的考察」 笠原 嘉(他編) 青年の精神病理, 弘文堂, 1976, p. 29—52.
- 49) 無藤清子 「「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性」 教育心理学研究, 27 : 28—37, 1979.
- 50) 無藤清子 「第9章 自我同一性」 原野・宮本(他編) 児童心理学の進歩 Vol. XXVI, 金子書房, 1987.
- 51) 長尾 博・前野重治 「同一性障害の分類の試みとその臨床的意義について」 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 21—1 : 15—24, 1976.
- 52) 長尾 博・遠藤辰男他 「Ego-identityの研究(9)—自我同一性障害に対するテストバッテリーの試みとその考察—」 日本心理学会第41回大会発表論文集, 1977, p. 886—87.
- 53) 中込四郎・鈴木 壮 「運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験(I)—Eriksonの相互性からみたスポーツ経験の特徴—」 体育学研究, 30—3 : 249—260, 1985.
- 54) 中込四郎・岸 順治・井菟 敬 「運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験(IV)—相互性の程度と対象表象—」 筑波大学体育科学系紀要, 9 : 21—29, 1986.
- 55) 中込四郎 「運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験(V)—運動選手の生育史における危機的場面—」 筑波大学体育科学系紀要, 10 : 43—51, 1987.
- 56) 中込四郎 「ある運動選手の生育史の中で生じた危機様態の分析」 体育学研究(32—4, 1988)に掲載予定.
- 57) Newman, B.M., College, R.S., and Newman, P. R., "The concept of identity: Research and theory," *Adolescence*, 13—49 : 157—66, 1978.
- 58) 日本体育協会スポーツ科学委員会 「スポーツ選手の心理的適性に関する研究—第1報—第4報」 日本体育協会スポーツ科学研究報告, 1979—1983.
- 59) 日本体育協会スポーツ科学委員会 「スポーツ選手のメンタネマネージメントに関する研究—第1報, 第2報—」 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告書, 1986, 1987.
- 60) 岡本祐子 「中年期の自我同一性に関する研究」 教育心理学研究, 33 : 295—306, 1985.
- 61) 岡本祐子 「成人期における自我同一性ステイタスの発達経路の分析」 教育心理学研究, 34 : 352—58, 1986.
- 62) 岡野フミ子 「青年期危機を迎えたある少年との面接過程—自力で歩き始めようとしたE君—」 心理臨床研究(九州大学) 3 : 13—21, 1984.
- 63) 大野 力 「人生的危機を思想形成—青年期の恋愛を中心に—」 思想, 4 : 441—51, 1960.
- 64) Parad, H.J. <1965>, *Crisis intervention, selected readings*, New York : Family service Association, 岡堂哲雄(編) 心理臨床入門, 新曜社, 1979, p. 273より引用.
- 65) Rapaport, L., "The state of crisis: Some theoretical consideration," *Social Service Review*, 36 : 211—17, 1962.
- 66) Rasmussen, J.E., "Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness," *Psychological Reports*, 15 : 815—25, 1964.
- 67) Redfield, J. and Stone, A., "Individual viewpoints of stressful life events," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47—1 : 147—54, 1979.
- 68) Riegel, K.F., "Adult life crises: A dialectic interpretation of development," in Datan, N. and Ginsberg, L.H. <Ed.>, *Life-span develop-*

- mental psychology: Normative life crisis, Academic Press, 1975, p.99—128.
- 69) Riegel, K.F., "The dialectics of human development," *American Psychologist*, 689—700, October, 1976.
 - 70) Rogow, A.M., Marcia, J.E. and Slugoski, B.R., "The relative importance of identity status interview components," *Journal of Youth and Adolescence*, 12 : 387—400, 1983.
 - 71) Rothman, K.M., "Multivariate analysis of relationship of psychosocial crisis variables to ego identity status," *Journal of Youth and Adolescence*, 7 : 93—105, 1984.
 - 72) Rowe, I. and Marcia, J.E., "Ego Identity status, formal operations, and moral development," *Journal of Youth and Adolescence*, 9 : 87—99, 1980.
 - 73) Rubins, J.L., "The problem of the acute identity crisis in adolescence," *American Journal of Psychoanalysis*, 28 : 37—44, 1968.
 - 74) Sarason, I.G., Johnson, J.H., and Siegel, J.M., "Assessing the impact of life changes: Development of the life experiences survey," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46—5 : 932—46, 1978.
 - 75) Schafer, R., "Concepts of self and identity and the experience of separation individuation in adolescence," *Psychoanalytic Quarterly*, 42 : 42—59, 1973.
 - 76) Schenkel, S. and Marcia, J.E., "Attitudes toward premarital intercourse in determining ego identity status in college women," *Journal of Personality*, 40—3 : 472—82, 1972.
 - 77) 下山晴彦 「青年期における「自分」の確立の研究」 東京大学教育学部教育相談室紀要, 4 : 109—18, 1981.
 - 78) 杉原 隆 「幼児の運動あそびに関する有能さの認知とパーソナリティの関係」 体育学研究, 30—1 : 25—35, 1985.
 - 79) 鈴木 壮・中込四郎 「運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験 (II) —競技レベルの低い選手と高い選手の比較—」 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), 9 : 89—98, 1985.
 - 80) 鈴木 壮・中込四郎 「運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験 (III) —性差の検討—」 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), 10 : 61—71, 1986.
 - 81) 武則祐子 「定年退職期の自我同一性に関する研究(3)—退職期の同一性ステータスの開発と同一性尺度・自我機能尺度による検討—」 日本心理学学会第25回大会発表論文集, 1983, 156—57.
 - 82) 高橋裕行 「自我同一性と Marcia の同一性地位面接: 批評的展望」 教育心理学研究, 32—4 : 74—82, 1984.
 - 83) 武田 徹 「運動によるパーソナリティの変容」 松田・杉原 (編著) 新版運動心理学入門, 大修館書店, 1987, p.223.
 - 84) 鑪幹八郎 「自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察」 広島大学教育学部紀要, 23 : 329—42, 1974.
 - 85) 鑪幹八郎・山本力・宮下一博 (共編) 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版, 1984.
 - 86) 同 上, p.99—112.
 - 87) 鑪幹八郎 「エリクソン, E.H.」 村井潤一 (編) 別冊発達: 発達の理論をきずく, ミネルヴァ書房, 1986.
 - 88) Waterman, C.K. and Nevid, J.S., "Sex difference in the resolution of identity crisis," *Journal of Youth and Adolescence*, 6—4 : 337—42, 1977.
 - 89) Whitbourne, S.K., "The me I know: A study of adult identity," Springer-Verlag, 1986.
 - 90) Worchel, P. and Byrne, D. (Eds.), *Personality change*, John Wiley and Sons, 1964.
 - 91) 山田良一 「青年期における自我形成の諸相—女子青年の日記分析を通して—」 山梨大学教育学部研究報告 (人文社会科学系), 29 : 146—53, 1978.
 - 92) 山岸明子 「おとなになること—Kohlberg 理論と Erikson 理論をめぐる—」 心理学評論, 26—4 : 272—88, 1983.
 - 93) Yeaworth, R.C., York, J., et al., "The development of adolescent life change event scale," *Adolescence*, 15 : 91—97, 1980.